

「日本靈異記」の冥界説話

——中国先行書との比較から——

入部 正純

一

「日本靈異記」(以下、「靈異記」と略記する)には、地獄・冥界に関する説話が十数例あって、「靈異記」の説話のなかで、一つの特異な位置をしめており、それ自体として、興味ある問題をふくんでいる。

ある人物が死んで、冥界からの使者(獄鬼)に召喚される。彼らは黄泉路をとって、冥府(閻羅庁)に至り、閻羅王や冥界の役人達の前に引き立てられる。そこでは生前の善悪の行為の軽重がはかられ、裁判にかけられる。その結果、悪業の重かった者は、一定の期間、地獄の責苦を受けて罪に服し、一方、善が勝っていた者や無罪が立証され

た者は、放免されて陽世に帰される。後者の場合には、蘇生者は帰路に地獄を歴訪して、墮地獄の悽慘な様子をつぶさに見学し、途中、受苦者の中に、なくなった肉親・知人などがあるのを見出して、彼らの生前の罪業を知り、その滅罪のために、蘇生後追善供養することを約束して別れる。ここにおいて善悪の業報の歴然たることを知った入冥者達は、罪を懺悔してこの世によみがえる、というのが靈異記の冥界説話のごく大ざっぱなあらすじである。

ところで、この〈冥界説話〉(または〈入冥蘇生説話〉)とよばれる一群の話は、いうまでもなく、古く大陸の中国において成長展開したのであって、彼地の民間に広範に流布して語られていた話型であった。したがって、わが国の

最初の仏教説話集である「靈異記」の話が、大陸の〈冥界説話〉の系列影響下に生れたものであることは疑うべくもない。事実、景戒が「靈異記」を編纂するに際して、その先蹤と仰いだ、唐土の「冥報記」(唐臨撰・三卷) および「金剛般若経集驗記」(孟猷忠撰・三卷) には、話型・発想の酷似する〈冥界説話〉を数多く見出すことができる。

「靈異記」の説話は、近時、とくに歴史的視野からの考察が深められてきている。つまり、説話が語る当時の歴史的情況——奈良朝から平安朝初期に至る社会・風俗・信仰などの諸事情を背景に、靈異記の内容および撰者の立場は、まさしくわが国における当時の産物であることが証明され、確認されつつある。したがって、かつてのような、靈異記は大陸の靈驗記類の地名と人名を組みかえただけの翻案説話集であるとの漠然とした理解はほとんどしりぞけられたといつてよい。それは靈異記研究の大きな前進であるが、しかしながらそれでは、靈異記所収の各種の説話は先行の中国産の説話をどのように消化しているのか、また、両者の系譜には具体的にはどのような撰取の仕方や変質が認められるのかという視点は、依然として残されているように考えられる。そしてそのことの確認が、靈異記の内容とその特徴を、よりあきらかにすることでもある。

う。この立場から、小論では「靈異記」と、靈異記にもっとも近い位置にある大陸の先行靈驗記二書「冥報記」「般若験記」(以下、先行二書と略称する) についてその〈冥界説話〉を中心にしながら比較検討してみたい。^⑧

二

冥界説話のおもな目的が、仏教的な因果応報の理を説きしめるところにあったのはまちがいないが、これらのはなしで興味あるのは、人間の死後の世界——他界がいかに考えられているかということであろう。冥界説話は、つまり他界の観念、あるいは死生観といったものを核として成り立っている。以下、その点について「靈異記」の説話を、次に先行二書のそれについて対比しつつ考えていくことにしたい。

「靈異記」の中で、冥界の様子がくわしく描かれているのは、下巻二二縁の他田舎人蝦夷の条であるが、まず、蝦夷が死んで冥府に至るまでの記述は次のようになってる。

使四人(冥府の使)有り。副ひて将住かむと告ぐ。広野あり、次に卒しき坂有りき。坂の上に登りて、観れば大きな観(楼閣)有り。是に峙ちて前の路を視れ

ば、数の人多に有りて、箒を以て路を掃ひて言はく
 「法花経を写し奉りし人、此の路より往くが故に、我等掃ひ浄む」といふ。即ち至れば待ち礼す。——(蝦夷は生前、法華経書写の功德を積んでいたのである)——前に深き河有り。広さ一町許なり。其の河に椅を度せり。数の人衆有りき。其の椅を修理して言はく、「法花を写し奉りし人、此の椅より度るが故に、我修理す」といふ。到れば便ち待ちて礼す。椅の彼方に到れば、黄金の宮有りて、其の宮に王有せり。椅の本に三つの衢有り。一つの道は広く平に、一つの道は草小し生ひ、一つの道は藪を以て塞がる。蝦夷を其の衢に立てて、一人宮に入りて曰さく、「召しつ」といふ。

蝦夷はそこで王から「草小し生ひ」た道を行くよう命令される。行先には地獄がある。彼は六日間、赤く焼けた鉄柱・銅柱を抱かされた。生前の蝦夷は、家財に富んで、稲・銭を人に貸付けては、利益をあげていた。しかし彼の出拳は貸出し時には軽いばかりを用い、徴取する際は重いはかりを用いるといった悪徳商法だった。地獄での報いは、その不正の罪のつくらないだったのである。しかし蝦夷はかつて法華経三部を書写供養していた。そしてその功德によって許されて、現世にかえることができたという。右に

引用した箇所は死者が冥府(閻羅庁)に至るまでの途中を描いた部分である。つまり、この世とあの世の境界(冥界への通路)がこのように考えられていたということである。ここで注意されるのは、冥界に至る途中に、「広野」「卒しき坂」「深き河」があり、またそこには「橋」がかり、さらに「三筋の路」などの描写があることである。さて、「広野」があるのは、この下二二の例のみであって他の冥界説話には見えない。「卒しき坂」は、下二三にも見えていて、「往く道の頭に甚だ峻しき坂有り」とある。次に「深き河」であるが、現実世界と冥界の境に川が流れているという考え方は、このはなしを含めて三例みえてい。「靈異記」においては、この他界観はやや固定化しつつあるようである。下九の藤原広足のはなしでは、

往く前の道、中断えて深き河有り。水の色黒黛くろくろくして流れず。沖く寂びたり。楸(若木の枝)を以て中に置くに、彼方此方の、二つの端及ばず。

とあって、いくぶん冥途の川らしい表現になっている。ただここでは橋はかかっていなかったことになっている。広足は使者の渡るあとに従って川に入り、対岸に到ったという。また上三十では、

(使二人)伴に副ひ往く程、二つの駅度る許なり。路

の中に大河あり。椅を度し、金を以て塗り蔽れり。其椅より行きて彼方に至れば、甚だきましく懣もどろき国有り。

とあって、先の蝦夷の話に類似する。

ところで、蝦夷はこの橋を渡って、「黄金の宮」つまり閻羅王庁に着いたわけだが、そこから道は三本に分れていったという。この「三道」は下二三の同伴連忍勝のはなしにも見える。

坂の上に登りて、躊躇ひて見れば、三つの大きな道有り。一の道は平に広く、一つの道は草生ひ荒れ、一つの道は藪やぶらを以て塞がる。衢の中に王有り。

死者がこの「三本の道」のいずれを行くかは、生前の所業の善悪によって定まるのであろう。したがって、その衢の中に罪の審判者である閻羅王がいるとされる。蝦夷は「草小し生ひたる道」を、忍勝は「平なる道」を行くように王から命令されている。そうすると、ここはすでに、この世とあの世を結ぶ通路ではなくて、善悪の業報を受ける場所と見なければならぬ^⑤。それはいまはともかくとして、右に抽出したような他界観が「靈異記」の冥界説話のすべてにあらわれているわけではない。中一九・中二五・下三五・下三七などの話では、このところの記事は全くなくて、ただ「死んで閻羅王の国に至る」とあるのみであり、

また、次の如く単純な記述になっている例もある。

閻羅王の使二人、来て光師（智光）を召す。西に向かひて往き、見れば前路に金の樓閣有り。（中・7）

行く路広く平かに、直きこと墨繩の如し。其の路の左右に、宝幡を立て列ね、前に金の宮有り。（中・16）

以上に見てきた靈異記の他界の様相は、一面においては未だ十分に成熟していない点をふくんではいるが、そこにはある固定化あるいは観念化が認められることも確かである。冥界がどこに存在するにせよ、要するにそこは、人間の靈魂が行く世界である。そうすれば、この現実の世と冥界の間には、幽明の世界を画する一線が考えられねばならない。気がついてみたら閻羅王にいた、というはなしも多い。が、ともかく先に見た部分ではっきり認められるのは、「卒しき坂」を越え、「深き河」を渡って魂が冥界に赴くという考え方である。靈異記には、またその名が現れていないが、これはすでに指摘されているように、平安朝以降の文学作品などによく見られる「三途河」（奈河・三瀬川）および、「死出の山」に相当するのであろう。後世この信仰がわが国の民間に深く浸透したことはあらためて指摘するまでもない^⑥。

それでは、「靈異記」にあらわれたこの他界表象は、「冥報

記「般若験記」にも同様に認められるのだろうか。先行二書では、この点がどうなっているのか。当面の関心はそこにある。

三

先行二書のはなしを次にいくつかあげてみよう。

(イ) 馬嘉運は、日暮に家の門を出ると、馬をつれた二人の男が門外の樹のもとにいる。二人は東海公の使者となり、嘉運を迎えにきたのだという。嘉運は常に州里の貴人の招待を受けており、その迎えを別に不審に思わなかった。自分に馬がないという、使者は彼に馬を与えた。その馬に乗って去ったと思つたが、その実、彼は樹の下で卒倒したのであった。と忽ち一官曹に至る。宮殿の大門の外には訴え事をするらしい男女数十人がいる。そのなかに、彼と旧知の婦人がいて話しかけてくる。婦人は以前に殺された人であった。嘉運はそれではじめて自らの死を知つたという。(論旨に関連する部分のみの梗概を示す。以下同。)

(真報記・下巻)

(ロ) 李丘一は重病で死亡したが、段となれる兩人が来て、王の命令でお前をただちに追捕するという。同時に追われる者五百余人。みな、枷・縛をかけられている。数里ほど

行くと一人の白馬に乗った朱衣姿の者が、声高になぜ丘一は枷をしていないのかと叫ぶ。私の祖父は五品の身分で自分も官吏だから枷を著けられるべきでないと言ひ果てないうちに忽ち全身、枷が著けられてしまふ。彼にはその理由がわからない。さらに十数里すすむと、大きな槐樹が数十本あって、各樹の下に馬槽がある。段にたずねると、ここは人間の行状を記録する五道大神が馬を息ませる場所だといふ。それを聞いて丘一は自分が死んだことを悟つた。そしてついに王門に至つた。

(験記・下巻・功德篇)

(ハ) 梓州の姚待は門外に彼を喚ぶ声を聞いた。心では出たいと思わないのに、体は自然に門の外に出ていた。帯刀の黄衣姿の使者がいて、ついでこいと言ふ。彼の門前に谷川が流れていたはずなのに、谷川はなくて平坦な大道がある。両側には樹があり、そこを三四里行くと大城があつて、使者はこれは梓州の城だといふ。あまりに立派なので、これは梓州の城ではないといふと、使は「だまれ」といふ。その五重の門をくぐると大きな宮殿があつて、容色端麗の紫衣の人の前に至つた。

(験記・下巻・功德篇)

ある日突然使者がきて、お前を連行するといふと、よばれた者はただ使者のあとに従つて冥界に至る。「靈異記」と先行二書でここはほとんどおなじである。ところで使者

に招喚された瞬間がすなわち肉体の死を意味するわけだが、肉体は死んでも魂は生きている。そして魂は現実の風景とはなんら異なる世界に導かれる。そうであれば、当の本人にはその時点で死の自覚はないはずであった。しかし死生はあくまで境を異にする。したがって嘉運の場合には、馬に乗ったと思つたのは実はその場で卒倒したのであつたという説明がくわえられる。また嘉運自身は、立派な建物(実は閻羅庁)のままで、さきに死亡した知人に出会うことで死を知り、同様に丘一は五道大神という冥官の称を聞いて、自分が冥界に入ったことを知つたわけである。さらに冥界の様子は現実世界を焼直しただけのものだが、もちろん現実世界そのままではない。姚待の家の前の風景は現実のそれとは一変していた。また使者が梓州の城だといつたのも、勿論、現実のそれではなく、門ごとに額があるのだが、「篆書に似て、其の字を識らず」、つまり、あの世の文字だったのである。

肉体と靈魂の分離が信じられて、靈魂の世界が陽世と二重写しの世界に考えられる時、幽明を画する一線は右のよるな形をとるのであろう。それはいわば表と裏の二重構造の世界である。事実、この世とあの世とは夜と昼が逆であつた。この考え方は「靈異記」にはみられないが、先行

二書にはしばしばみられる。一例として「冥報記」(中巻)孫廻璞の条を見よう。

廻璞は天子の行幸の供として九成官の三善谷に住んだ。ある夜、十時頃、二人がきて、太師がおよびだといって馬に乗せた。ついてゆくと、天地は日光が輝いて真昼のようである。彼はそれを訝しく思ったが、あえて口にしなかつた。谷口を出て、六七里行った時、遠くに韓鳳方がやはり二人の男に連行されている。その二人がこちらにむかつて、「お前達はまちがっている。我々が捕えたのが当人だ。その人を放してやれ」というと、廻璞は放免された。もときた道(平生と変らない)をかえつて、家に入ると、自分の身体が妻と寝ているのが見える。そして自分の身にゆこうとするがゆげない。壁際に立って大声で妻を呼ぶけれど返事がない。そして部屋の中は非常に明るかつた。どうしても彼は身体に近寄れず、はじめて、自分は死んだのだとわかつて悲しくなつた。そのうち、うとうととしてはつと目覚めると、寢床にいて、あたりは真暗闇、蘇つたのである。鳳方はその夜死んでいた。

廻璞は冥府に至らない途中で蘇生した。だからこれは厳密な意味で、冥界説話とは呼べないが、死による靈魂の肉体からの分離と、その靈魂のゆく世界が、まさに陽世の裏

返しにされた世界であることが、このはなしではつきりする。幽明二つの世界は、いってみれば一平面上の裏と表の世界であった。なお、先行二書での蘇生する時の記述には、この廻璞の話に類するものが多い。例えば李山龍（眞報記・中巻）は家に帰って家人を見ると哭きながら彼の殯具を準備している。そして「山龍入至屍傍。即蘇」とある。

ところで、靈魂が身体から離れて外側から自らの肉体を見ているという話は「靈異記」にもある。しかもそれは撰者景戒自身の夢中での体験であった。（廻璞のはなしの背景にも、実際の夢での体験が影をおとしているであろう）。下巻三十八縁後半の著者の自伝的文章である。

延暦七年戊辰の春三月十七日乙丑の夜夢に見る。景戒が身死ぬる時、薪を積みて死せる身を焼く。爰に景戒が魂神、身を焼く辺に立ちて見れば、意の如く焼けざるなり。即ち自ら楯を取り、焼かるる己が身を策策き、椀に申き、返し焼く。先に焼く他人に云ひ教えて言はく「我が如く能く焼け」といふ。己が身の脚膝節の骨、臂、頭、皆焼かれて断れ落つ。爰に景戒が神識、声を出して叫ぶ。側に有る人の耳に、口を当てて叫び、遺言を教え語るに、彼の語り言ふ音空しくして聞かれざれば、彼の人答へず。爰に景戒惟ひ付らく、

死にし人の神は音無きが故に、我が叫ぶ語の音聞えざるなり。

この夢の内容は奇怪、かつ悽慘でもある。身体からはなれた魂が、自らの火葬に立会い、焼きつきるわが肉体を凝視しているという。が、景戒は「若し長命を得むか、若し官位を得むか。今より已後、夢に見し答を待ちて知らむとのみおもふ」と言つて、これを吉夢と占つた。（あるいは逆夢と解釈したのかもしれない。）そしてその期待どおり、景戒は延暦十四年十二月三十日に伝燈住位の僧位を獲得した。なにゆえ彼が、このような夢解をしたのかよくわからない。あるいはそれは「肉体的死と魂の存続は、過去の生への死と、生死を超えた境地を求めての再生」を意味したのかもしれない。が、ここでたしかなことは、景戒が肉体と魂の両者を区別し、死後の靈魂の存在（魂の世界）を信じていたという事実である。そして、景戒の夢にあらわれた彼の魂は、「冥報記」の廻璞のそれと、性格がはなはだ類似している。彼の夢の背景に、どのような景戒自身の体験・信仰が影を下しているのか明確にできないが、そこには右に述べてきたような、肉体と魂の分離を語る中国の冥界譚からの影響を認めることはできないであろうか。

四

ところで、以上までに見てきた「靈異記」と先行二書の冥界説話において注目される点は、死者が冥界に至る道中——幽と明の世界の境の様相がまったく趣を異にしているということである。それは両者の冥界譚の一つの際立った相違点とみなされる。ここで、先行二書の例をもうすこしあげてみよう。冥府に至る道中の部分である。

- (イ) 始忽見人喚。随至一处。有大地穴。所行之道。径入穴中。纔到穴口。遙見西方有百余騎来。儀衛如王者。俄至穴口。乃周武帝也。儀同拜之。帝曰。王喚汝。証我事耳。汝身無所罪。言訖即入穴中。使者亦引儀同入。便見宮門。
(冥報記・下③)

- (ロ) 初死時。見四人来。至其所云。官府追汝。璠随行入一大門。見有序事甚壮向北立。
(同右・下⑤)
- (ハ) 初死。有兩人来取。乘空南行。至官府。入大門。
(同右・下②)

- (ニ) 忽有^{人名}二^{人名}両鬼^{人名}来至^{人名}床前^{人名}手持^{人名}文牒^{人名}云^{人名}王今遣^{人名}取^{人名}公^{人名}来^{人名}文策^{人名}即甚忙怕^{人名}乃^{人名}逐^{人名}使者^{人名}而去^{人名}将^{人名}至^{人名}一大城^{人名}。
(験記・上延寿篇)

- (ホ) 命終遂被^{人名}将^{人名}向^{人名}王前^{人名}一^{人名}閻^{人名}過^{人名}徒^{人名}衆^{人名}甚^{人名}多^{人名}通^{人名}在^{人名}後^{人名}而立^{人名}其^{人名}。

典唱^{人名}名王^{人名}即問^{人名}其^{人名}善^{人名}惡^{人名}之^{人名}業^{人名}。(同右・上延寿篇)

(イ)の例では、冥路は大地の穴の中に通じていたとあって、冥界は地下の国に考えられているようである。ところが(ロ)の場合では、大空を南の方向に飛んで行くと冥府に至ったとあって、逆の考え方も見える。そのほかの(ハ)(ニ)(ホ)は、幽明界の途中の描写を、まったく欠いているか、ごく簡略な話である。同類の例は「靈異記」についても前述した。ただ先行二書の冥界譚では、実はこういう例の方が圧倒的に多い。

さて、先の馬嘉運・李丘一・姚待のはなしや右の例にあらわれた中国先行書の他界表象は、「靈異記」のそれと異質のものであることは明白であろう。「靈異記」では、死者は「広野」を通過し、途中「卒しき坂」を越え、「深き河」あるいはそこに架る「橋」を渡って閻羅庁に至るとされる。むろんそこには先に述べた如く十分に固定化していない面もあるが、ほぼ観念化されたものが認められた。ところが、この「靈異記」と同類の他界描写は、先行二書に見いだせないのである。

元来、この現実の世と冥界の中間に、山や河・橋が存在して、人々はそこを通過して死者の国に至るとする俗信仰は、世界的に広く分布し、はるかに古い起源を有する観念

であると言われる^⑥。大陸の中国においても、この系譜は見られる。古く六朝時代の仏教的な冥界譚に冥界の河の萌芽的なものが二・三例認められ、のちに「奈河」と呼ばれ、唐代に至ってその輪郭をととのえたと言われる。敦煌の「大目乾連冥間救母變文」には、いわゆる奈河の奪衣婆・懸衣翁の伝承の原型があらわれている。因みに「般若驗記」にも奈河の名が一例みえる。つまり僧清虚(中巻・神力篇)が入冥して金剛般若経を読むと、地獄に墮ちた者の多くがその功德で救済された。その中の三人の者が、共に新調の衫を着て、清虚にお礼を述べて、「被_レ閻羅王勅_レ当_レ二経_レ今年_一。不_レ識_レ漿水一滴。其衫是生時所_レ造死後始著。当_レ被_レ勅_レ当_レ其衫被_レ剥_レ著_レ奈何樹頭_一所以得_レ新」と語ったとある。

ところで「靈異記」にあらわれた冥界の状態も、広い視野で見れば、このような古い大陸からの他界観の系譜下にあるのであろう。しかし、ここで指摘すべきことは、「靈異記」の他界表象は、先行二書のそれとは直接的な系譜が認められないということであり、それは「靈異記」自体の発想にもとずいていると一応考えられるのである。

わたしは先に先行二書では、生と死の世界は、いわば表と裏の二重構造の世界であるといったが、「靈異記」の死の世界は、むしろこの世と一つづきの異郷といった感じが

強いように思われる。この相違は、あるいは両者の靈魂観の相違にもとづくのかもしれない。つまり、前者は肉体と靈魂の分離を厳密に考えるのに対し、後者はその点にいくぶん曖昧さを残しているのである。それはまた、両者の冥界説話の歴史の深淺にも関わる。中国冥界譚の展開については前野直彬氏の論考がある。それによれば、中国の冥界譚は仏教伝来以前からかなりの展開をとげ、古来の道教的な信仰や泰山府君の信仰を基盤に(先行二書にもこれらの信仰は濃厚にあらわれている)、冥界、つまり魂の世界が、次第に整備されて一つの型をもった世界が構成された。はなしがはなしを生んで、冥界は現実世界そのままの相相を呈するに至る^⑦。しかし冥界はあくまで冥界であった。ここに先に見た先行二書の冥界観の背景があるわけである。ところで「靈異記」以前には、わが国ではかような「魂の世界」は未だ形成されていなかった。両者の相違は、この背景の違いに理由があると思われるが、わが国には「古事記」「日本書紀」の「黄泉の国」の觀念がある。黄泉については、本居宣長の有名な解釈がある。黄泉は、根之堅洲国というに同じく、地下の穢い国であって、貴賤善悪を問わず、人は死んですべて赴く常闇の国であるという(古事記伝六卷)。つまり黄泉の国は、混沌とした闇黒

の世界であり、それは一つの觀念とも呼べない、いまだ魂と肉体がはっきり分離意識されていない世界である。「靈異記」の冥界に「黄泉の国」的なものが認められるとすれば、この点であろう。なお、「靈異記」の冥界を、特に黄泉の国と関係づけて説いたものに、守屋俊彦氏の論考があり、いまはそれにゆずる。

五

冥界から帰還する者がなければ、そもそも冥界説話が成立しないのはいうまでもないことである。しかし、いったん冥界に入ると、容易にこの世に帰ることができないという考え方はあった。たとえば「靈異記」の次のはなしを見よう。

膳臣広国は、亡妻の訴えで閻羅庁によばれたが、訴えはしりぞけられて無罪とされた。彼はまた、地獄に墮ちていた亡父に会って、受苦の模様をまのあたりにする。帰途、庁の門に来ると、門番が「内に入る者は、更に還し出さず」といつて遮る。広国は困って躊躇していると、小子があらわれる。門番は小子に礼拝する。小子は広国を脇門に導き、門を押し開いて「速かに往け」という。広国が小子に尋ねると、「我を知らむと欲はば、汝が幼稚かりし時に

写し奉れる観世音経是れなり」と告げた。門を出たと思つた時蘇っていた。(上・三〇)

このはなしには、あの世からこの世へは、越え難い一線があること、そしてその困難を救う観音の靈験が語られている。ところで、これに類する考えは、先行二書の冥界説話にはよくみえているものである。次に一例を示す。

慕容文策は、生前に般若その他の経を昼夜に誦誦していた。彼は閻羅王から「未_レ合_二身死_一」と放免されたが、帰路に迷った。その時、十五・六の二人の沙弥が燈を手にしてあらわれ、あなたが毎日般若経を持ち、齋戒していたから救つてやろう、「我執_三明炬_二在_レ前。檀越但從_三我後_一」と彼を導く。途中、十八地獄を歴訪して、五本の道の分岐点に至る。僧がその中道を導くと、一大門に至った。門は堅く閉され、文策を寄せつけないが、僧が錫杖で押すと開き、そこから蘇った(驗記・上卷・延寿篇)。さきの広国のはなしと全く同類である。実は、先行二書では、この帰路の部分が詳しく語られる傾向にある。それに比して、冥土への道中はごく簡略で、この点では「靈異記」の説話と対照的である。

ところで、「靈異記」に「黄泉の国」の觀念が見える好例として、よく智光の墮地獄のはなし(中七)が問題にさ

れる。学僧智光が行基を非難した口業の罪で地獄の苦を受けた時、「慎、黄竈火物をな食ひそ。今は忽に還れ」と告げられたという。また上三十には「家に還る可し。然れども慎、黄泉の事を妄に宣べ伝ふること勿かれ」ともある。

あきらかにこれは、「記紀」のイザナギ・イザナミの黄泉の観念(死者の国で食事をするとこの世に帰れない)と同じものである。ただこれは「靈異記」の冥界譚特有のものではなく、先行二書にも同類の考え方が見えることは一応注意しておかなければならない。

つまり、柳智感は、昼はこの世の官吏、夜は冥府の判官として幽明の世界を往復したが(わが国にはのちに小野篁のはなしがある)、冥府で食事しようとする、他の判官がとどめて「君既権判。不宜食此。」といい、「智感従之。意不敢食。」とある。(眞報記・下巻)

また、元大宝は因果を信じなかった。死後友人の張叡冊の夢にあらわれ、墮地獄の苦を訴える。張が冥土の様子を尋ねると「冥土のことはもとよりあなたに語ることはできない。ただ報応が確實にあることのみをお知らせする」と告げた。(眞報記・中巻)

上巻の序文にあきらかなように、景戒は先行二書を読んで啓発され、「自土の奇事」を宣揚するために、「靈異記」

を編纂した。それは一種の国家主義的な意図であったが、そうであれば当然、彼の意中には常に大陸を意識し、自土の奇事を大陸の靈験記のそれに対応させて語ろうとする気持ちがあったはずである。仏教とは無縁の古来の民間伝承を、無理に因果律で解釈しようとする態度も、基本的にはその意識に由来する。したがって、冥界を「黄泉の国」と呼び(上三〇・下二五・下三七)、また先の用例などをもって、ただちに「記紀」的な要素を「靈異記」の冥界観そのものの中に求めることには飛躍の感がある。勿論、冥界説話の一種の日本化であることには相違ない。しかし、それは先行二書の内容からさまざまのヒントを得、触発されて、それを日本の古来の思想・信仰などで解釈しなおしたということに、むしろ意味を見いだすべきではなからうか。

六

以上、比較してきたところは冥界説話のなかでも、両者の冥路の部分のみである。さらに、閻羅庁・地獄観、また冥府の獄鬼に関する説話など、比較すべき事柄は残されている。とくに、「靈異記」の死後の審判の場としての冥府には、未分化の要素・初期的な混乱が認められる。たとえば、善報を受ける極楽あるいは天上界的な世界と、悪報を

受ける受苦の場が混同して現われたりもする(中七・中十六)。これらの問題もすべて後日にゆずることとする。

小論で述べたことは、ただ、「靈異記」の冥界説話は中国の先行書のその直輸入ではないということである。いいかえれば、仏教的な死後の業報を主題とする地獄・冥界説話を自らの中で独自に消化しているという、いたって平凡な結論に帰着する。先にもふれたように、中国の冥界説話は、仏教以前から、はやく説話的展開をとげていた。そしてたとえば、先行二書にあらわれた冥界の主宰者およびその眷族の組織も、仏教系・道教系(泰山府君系)が混淆して、現実の官僚機構そのままに複雑奇怪な様相を呈している。前野直彬氏や沢田瑞穂氏の論著にこの点はくわしいが、「靈異記」は、このような性格をほとんど受容してはいない。冥界説話のわが国への移入時において、はっきり撰取出来る面とそうでない面の日本的な取捨選択がおこなわれたことを意味しよう。また墮地獄の思想では、「靈異記」の方がむしろ仏教的業報観を素朴ながら的確に受容している如くである。⑥ただ反面、「靈異記」の他界表象にわが国古来の要素が見えるという理由から、大陸とは無関係に、わが国古来の觀念だけで靈異記を解釈することは出来ないだろう。それはやはり、大陸説話の系列下に、それを

源泉にして表出されたものとみなさねばならない。

註

- ① 『太平広記』は宋の時代に集大成された説話集だが、その鬼類・再生類などには六朝からの多くの冥界譚を集録する。
- ② 拙稿「靈異記」と「冥報記」について(『芸芸論叢』第一号)で、二書を全体的に比較した。そこで冥界説話についてもごく簡単にふれたが、本稿はその点を発展させたものである。
- ③ この三道に類する話が『冥祥記』(六世紀、王琰の撰)の石長和の話にある(広記卷三三三所収)。この「靈異記」の三道については岩本裕氏著『極楽と地獄』(三一書房)一八三頁〜二〇七頁に考証されている。
- ④ 平安末期の偽経とされる『地藏菩薩発心因縁十王経』の出た頃には広く浸透していたと考えられている。
- ⑤ 中村恭子氏著『靈異の世界』(筑摩書房)九頁。この夢については他にも、福島行一氏「日本靈異記」下巻三十八縁に就て(『芸文研究』第十号)・守屋俊彦氏著『日本靈異記の研究』(三弥井書店)所収の「景政のある表情」などで考察されている。
- ⑥ 渡辺照宏氏著『死後の世界』(岩波新書)一五九〜一六一頁参照。
- ⑦ 前野直彬氏「冥界遊行」(『中国小説史考』(秋山書店)所収)参照。
- ⑧ 岩本裕氏・前掲書一八九頁参照。
- ⑨ 前野直彬氏・前掲論文参照。
- ⑩ このことは倉石武四郎氏著『中国文学講話』(岩波新書)

でも、指摘されている。

⑪ 守屋俊彦氏「金の宮―靈異記における他界―」（『日本靈異記の研究』所収）。

⑫ これと同じ理由で、入冥者がこの世に返えされる例は先行二書には多い。「靈異記」下三〇にも同じ例があつて「時王授之、不_レ合_二死期_一故、更敢返。」とある。

⑬ 『江談抄』卷三・『今昔物語集』卷二〇・『三国伝記』卷四などにみえる。

⑭ 多田一臣氏も「靈異記と景戒―自土意識をめぐって―」

（『国語と国文学』S 51・1）で、この点について考察されている。

⑮ 前野直彬氏・前掲書。沢田瑞穂氏著『地獄変』（法蔵館）。拙稿前掲論文②参照。

（附）なお、「靈異記」の本文引用は岩波日本古典文学大系本の訓み下し文に依る。「冥報記」は、『校本冥報記』（内田道夫氏編・東北大学文学部支那学研究室）に依り、「般若験記」は『続蔵経』所収のものに依った。

（本学助手 国文学）